呼ぶ声

工藤るう子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呼ぶ声

【Ｎコード】
Ｎ４８９８Ｏ

【作者名】
工藤るう子

【あらすじ】
誰かに呼ばれたような気がした。
気がつくとそこは血なまぐさい神＝王の支配する異世界だった。
両性具有になり人を癒す力を持ってしまった、ごく普通の男子高校生だった潤の話。（転載）

1回目（前書き）

とくにR指定はしませんが、残酷描写や色っぽいシーンもあります。両方とも生温い程度ではありますが、苦手な方もいらっしゃることと思いますので、その辺は自己責任でよろしくお願いします。

1回目

国は災厄に覆われていた。

長い長い災厄だった。

つむった目からは涙が流れ、食いしばろうとする口からは悲鳴が迫りあがる。塞いだ耳には、ひとびとの苦鳴が絶え間なく届いた。

空を閉ざす黒煙は、ひとの焼かれる独特の臭気をふりまく。

大地を濡らすのは、ひとの血潮や涙に他ならない。

災厄の源は、大理石と翡翠と黄金とで造られた王宮である。

民もが踏み込むことのできる外殻では、無惨な光景が繰り広げられている。

掘られた深い穴の底には焼けこげた人間の成れの果てが積み重なっている。鋭い杭にはひとが貫かれ、後ろ手に縛められたものの引き裂かれた腹からは腸が溢れとぐろを巻いている。

振り下ろされる鞭、刃。

馬の蹄鉄は横たえられたものたちのからだを害してゆく。
鋭いガラス片の上を引きずられるもの。
四肢を引き裂かれるもの。
首をはねられるもの。
泣き叫ぶ被害者たち。
黙々と行為を繰り返す灰色の衣をまとった男たち。
山と積まれた死人の山。
拷問。
処刑。
酸鼻極める光景に、王宮を見る者はいない。
芯から凝りつくかの心地で、目を逸らせるのだ。
民の祈りも嘆きも、王宮の主には届かない。
狂える神に誰が逆らうことができようか。
ひとは怯え嘆き、身を縮こめる。
恨みや呪詛は黒雲に混じり、大地から立ちのぼる臭気と合わさっ

て、あまたの魔物が生まれ落ちた。

王は、無情に眺めるばかりだ。

楽しんでいるわけではない。

血に酔っているわけでもない。

酔っているのも楽しんでいるのも、王の隣にいる腹の大きな美姫だった。

手を叩き、火に投げ込まれる子供の絶叫を楽しんでいる。

魂消るような断末魔の痙攣を、恍惚と味わう。

そんな女を、王以外の者たちは嫌悪に引きつった表情でそっと見る。

誰ひとりとして、処刑を止めるものはいない。

そんなことをしようものなら、次は自分たちに火の粉が降り掛かる。

先ほど火にくべられた少年は、美姫をたしなめようとした重臣の長男だった。

灰色の処刑人の服装をまとった男たちに新たに引きずり出されたまだ少年の面影を残す若者に、つややかな黒髪に金の飾りをつけた赤いくちびるの美姫が、舌なめずりせんばかりにその彩られた瞼を見開く。

紅をさして血塗れたようなくちびるが、細い三日月めいた嗤いをかたどった。金の瞳に残酷な喜悦がともる。

火にくべるか、槍で貫くか。

それとも、ノコギリで挽くか、馬に引かせるか。

幾通りもの残虐な殺害方法が、女の脳裏をいっぱいにしていた。

ぞろりと赤い舌がくちびるを湿した。

ちろりと隣をみやれば、何を考えているのか、王は眉間に皺を刻みつけたいつもの無表情のままである。

くつくつと笑いをこぼす。

膨らんだ腹を撫でさする。

眼下に引き据えられた若者こそが、王の後嗣を産むはずであったのだ。

見た目からはわからないが、若者は、双つの性を持つ者であり、誰よりも王の恋着を受けた者であった。

王の恋着を厭い、宿った子を堕ろすまでは。

2回目

若者は身内に宿った生命に恐慌した。

彼は元々この世界の人間ではなく、両方の性を持っていたわけでもなかったのだ。

元の世界で、彼はごく普通の高校生だった。

ある日、何かに呼ばれたような気がして振り返らなければ。

立ち止まらなければ、彼は今頃平凡な大学生になっていたことだろう。

立ち止まった時、彼は白金色に輝くなにかを見たような気がした。

すっぽりと抱きしめられたような気がした。

そうして、

『すまない』

男とも女ともつかない声で、謝られたような気がしたのだ。

そのまま、何かがからだの中にはいってきた。

そんな錯覚を覚えて気を失った。

からだが内側から作り替えられてゆくかの苦痛に、どれだけの間さらされつづけたのか。

気がついた時、そこは異世界だった。

3回目

「潤」

「にいちゃん」

伸ばされる二対の腕と潤と呼ばれた若者との間を、剣呑な光を宿す二本の刃が断ち隔てる。

「メガン、マルカ」

流れ落ちた脂汗が、若者の目に入った。

痛みに涙があふれそうになる。

「イヤだっ！」

血なまぐさい王宮へと連れてゆかれることは、どうしようもないくらいに恐ろしい。しかも、あの二人と別れるのだ。

この世界で呆然としていた彼を、助けてくれたのがあの二人だ。

そうして、彼をこの状況へと陥れた力を見いだしたのも、また、

彼らだった。

この世界に来てまだ一月にも満たない。そんな潤にとって、彼らは頼もしい家族も同然の二人だった。

巻き込んでは駄目だ。

そう思う心の反対が、彼らに縋りつこうとする。

伸ばす手を下ろすべきか。

悩む潤の手を取ったのは、メガンだった。

「俺たちも行く」

震えながら、それでも、メガンは兵士たちを見上げた。

「お前たちが？」

邪魔だと言いたそうなまなざしで、二人を見下ろす兵士に、

「二人も一緒なら、逆らわない」

潤は、そう言ったのだった。

潤はまだ知らない。

自分が何故王宮に連れてゆかれるのか。

王宮でなにが彼を待ち受けているのか。

震える手を、メガンとマルカのやはり震える手が握りしめた。

そんな彼らを感情のこもらない視線が見下ろす。

「行くぞ」

機械的な声が、彼らを促し、三人はようやく慣れようとしていた町外れの治療所を後にしたのだ。

潤を頼りに治療所へと足を運んだ老若男女たちが、絶望に青ざめて、彼らの背中を見送った。その中の幾対かが滚る憎悪を瞳の奥に潜めていることを、兵士たちは歯牙にもかけてはいなかった。

王は同時に神なのだと。

だからこそ、絶対であり、逆らうべき相手ではなかった。

ただひとりの王が統べる世界は、かつては平穏であったのだ。

それがいつ変貌を遂げたのか。

メガンとマルカが生まれた頃には既に、世界は恐怖に支配されていた。

貴族や兵士に逆らうこと、それは王に逆らうのと同じことだった。

それは、即彼らの破滅を意味した。

運が良くて、収監。

悪ければ、拷問の果ての処刑が待っている。

ふたりの両親は、地方の領主に逆らったとして、連れてゆかれた。

ふたりが逃げられたのは、幸いだった……のだろうか。

彼らがどうなったのか。

ふたりはそれを考えないようにしていた。

崖下の迷路のような洞窟で他の似たような境遇のものたちと一緒に、ケモノのような毎日を過ごしていた。

そんなある日、マルカは跳梁する魔物に襲われた。

日が陰る頃から夜が明ける寸前までは、魔物の時間だ。人々は、恐れ、震え、ただ何事もなく夜が過ぎることを祈る。

そんな時間に食べ物を探して洞窟に帰りそびれればどうなるのか。

奇跡的に逃げ延びたマルカだったが、魔の毒は、まだ十才の少年

の細いからだを冒していた。
たった一人きりの弟を救いたい。
その一心で森の中薬草を探し求めていたメガンの目の前に、潤はいた。
同い年くらいだろうか。
ただ立ち尽くしている。
見たこともない、しかし綺麗な身なりをしていた。
襲って金でも奪うか、物乞いよろしく哀れを誘うか。
悩んだのは少しの間のことだった。
「危ないっ」
咄嗟に潤の腕を掴んでいた。
しかし、どこからか突然現れた魔物の毒の爪は、潤の肩を抉っていた。
流れる血に気をとられている暇などない。
「なに惚けてるっ」
「死にたいのかっ」

潤を引きずるように逃げていた。

サルを縦に伸ばしたような魔物は、サルに似ている割には動きが俊敏ではない。だからこそ、彼らは逃げられたのだ。

逃げ帰った洞窟で、メガンは見た。

抉られたはずの潤の肩の傷が綺麗に治っているのを。

潤自身はそれに気づいていないようだったが、メガンは躊躇しなかった。

マルカを助けたかったからだ。

洞窟の奥に潤を引っぱり、草を寄せ集めただけの寝床に座らせる。そうして、マルカの傷に潤の手を当てさせた。

それから後は、奇跡だった。

潤が触れるだけで、マルカの傷はまたたくまに治ってしまったのだ。

それを見ていた洞窟暮らしの者たちが潤に手を伸ばす。

メガンのように負傷していないものの方が、少なかったのだ。

すがる手の主たちをすべて癒した潤の噂は、瞬く間に都から遠く離れたこの森から村へ町と広まっていった。

その速度は、まるで、なにかに操られるかのようだった。

癒しの手を持つ潤に、町の有力者が治療所を与えるからそこでひとを癒してほしい。そう言ってくるまで、どれほどもかかりはしなかったのだ。

メガンはためらった。

潤にはもうひとつ秘密があったからだ。

それは、彼が偶然知ることになった、潤のからだの不思議だった。

決して最初から、潤はそうではなかったらしい。

マルカたちの傷や病を治してから、しばらくの間床についた潤の世話をしていたメガンは、それに気がついた。

汗ばんだからだを清めていたあの時、潤の下半身の不思議に気づくことになったのだ。

それは、同時に潤も自身の変化に気づいた瞬間だった。

自分のからだの変化に気づいたあの時の彼の恐慌に、メガンはただ激しく震える潤を抱きしめることしかできなかった。

「オレ、こんなじゃなかった。オレ、男だった。女じゃなかったんだっ」

男であると同時に女でもある。そんなものが存在するなど、メガンは知らなかった。自分が知らないだけかもしれないが、それでも、これまで、彼は聞いたこともなかった。もちろん、見たこともなかった。

からだを拭っていた時に見てしまった、不思議をかたどる下半身が、目に焼き付いていた。

信じてくれと縋りついてきた潤に、メガンは、うなづいた。

うなづくよりなかった。

そうして、それは、メガンと潤、ふたりの秘密になった。

町になどいたら、知られはしないだろうか。

いや、それは、どこにいても同じだろう。

秘密などなにからバレるか、知れたものではない。

メガンは首を振った。

守ってやる。

オレが、お前を。

潤は決して、女のような外見をしているわけではない。

一目見て誰もが少年だと看做すに違いない。

彼が主張するように、ずっと男だったのだろう。

ちょっとした仕草もなにもかも、男のものだ。

決して美形ではない。

鳶色の髪と瞳の、凡庸な顔立ちの少年だ。

けれど。

メガンは思い返す。

あの時感じた、潤から立ちのぼった彼の体臭を。

うっとりするほど甘い匂いだった。

あの瞬間、メガンはそうと知らず、潤に囚われたのだ。

男だけど間違いなく女でもある、そんな潤を、いつまでもこんな環境の悪い洞窟暮らしなどさせていていいはずはない。

色々な恐ろしいことはどこにでもある。ならば、少しでも住みやすいところにいたい。食事にも困らなくなるだろう、寒さに震えることもなくなる。だから、

「承知しなよ。オレとマルカも手伝うから」

そう、勧めたのだ。

勧めなければ良かった。

メガンは兵士たちについて歩きながら、後悔せずにいられなかった。

4回目

絶望のまなざしが、潤を見る。

絶望のその奥に、憎悪を感じて、潤の背中が震えた。

憎まれている。

城に来る前に自分に向けられていた感謝のまなざしとは真反対のそれに、潤の心は折れそうになった。

それもそのはず。

血なまぐさい噂の王宮に連れて来られた潤に課せられたのは、罪人の治療だったのだ。

目を背けたくなるほどの傷を負い血を流す多くの罪人たちを、癒すようにと命じられた。

意外だと思った。

王宮で行われている凶行は、潤の耳にだけ入らないなどというはずがなかった。

苛虐を好んでいるのが王妃であり、王は王妃を諌めることすら放棄しているのだと言う。

どうしてだ……と訊ねた潤に、誰もが口をつぐんだ。

メガンもマルカも何も言わなかった。

なにか、触れてはならない理由があるようだった。

それでも。

どんな理由であれひとを傷つけていいわけがない。

しかし、ここは、専制君主の世界である。王は神であり、神であるからには絶対であるのだ。神である王に愛されているという王妃もまた、神に愛されているからには絶対の存在なのだ。

誰ひとりとして、王と王妃とに逆らう術はない。

逃げ場のない閉じられた世界は、それ自体が巨大な処刑場であり、人々は老人から赤ん坊にいたるまで、引き出されるのを待つしかない囚人のようなものでしかないのだ。

自分もまた例外ではないのだと、引き立てて行かれる間中、潤はどれだけ不安と恐怖にかられていただろう。

『城に連れてゆく』と。

『そこにお前のなすべき役目がある』と。

そう言われていてさえ、恐ろしさが勝った。

メガンが同行を言ってくれなければ、逃げ出していたに違いない。

もしもあの時逃げ出していれば、自分は今頃どうなっていただろう。

恐ろしい想像に潤の全身が震える。

「そら」

灰色の上着を着た男が荷物のように、傷だらけの人間を潤の前に投げ落とした。

思わず後退さりそうになる。

どんな拷問をされたのか想像したくないほどのありさまで、血まみれの囚人は呻く力もないのだろう。

なのに。

潤が意を決してしゃがみ込んだ途端、痛くないはずがないというのに、動くことすら辛いだけだろうに、全身を固くして潤から離れようとしたのだ。

その濁ったまなざしに込められた絶望と憎悪とを、潤は長時間見返すことはできなかった。

自分もまた加害者なのだ。

それを痛いほどに感じながら、囚人のからだに手をかざした。

途端。

全身に襲いかかるのは、決して慣れることのない、苦痛だった。

焼け爛れるような、痛みである。

鞭を打たれ、膝から下を縛められ少しずつ砕かれてゆく。

爪を剥がれ、口に押し込められた漏斗から水を流し込まれる。

内臓が裂ける。

喉をこみあげてゆく生臭い血の味。

王妃のお気に入りの囚人は、死の寸前まで追いやられては潤の癒しの力で生を繋がれる。

それがどれほどの地獄であるのか。

瞬間的な追体験を繰り返す彼にとって、決して他人事ではないのだ。

一瞬にして、囚人の受けたさまざまな拷問と苦痛とが流れ込んでくる。

そうして、消えることはない。

ここに連れて来られてまだ三日に過ぎないというのに、彼の脳内には、十数名の囚人のたどった拷問とその時に受けたダメージとが刻み込まれていた。

そのせいだろう。

潤の鳶色の髪は、わずか一日で白髪へと変貌を遂げてしまったのである。

すまない。

うるう……と、ここでは呼ばれない本当の名前をささやかれる。

男のようであり、女のような、不思議なトーンの声が哀しそうに名前を口にするのだ。

愛したひとの心だけは乾かすことがないように。

少なくとも……と。

そう願ってつけられた名前だった。

しかし、つけた本人以外からは呼びにくいからと、“ジュン”と呼ばれる。

潤自身、そちらの方が馴染み深いものとなって久しかった。
だから、メガンに名前を聞かれた時、自然と“ジュン”と名乗ってしまったのだった。
もっとも、こちらの世界では、“うるう”という発音は難しいらしい。
その上……
ためしに発音してもらった時、メガンが青い顔をして、
『いいか、潤、そのことばを口にしちゃ駄目だ』
と言ったことが、潤の印象には強く残っている。
……禁忌にされていることばであるようだった。

5回目

ひとのからだから流れ出す液体とひとの鼻を麻痺させる香の混じりあった臭いが、ゆるやかに吹く風に追いやられてゆく。

昼の時刻に休みを取れと追いやられて、潤は北の塔を後にした。

うねる蔦に絡めとられた黒い石造りの北の塔は、この大理石の白と翡翠と黄金から成る城には異質の存在だった。

黒々とその不吉な姿を晒す北の塔の周囲には、その塔の役割を考えると不釣り合いな光景が広がっている。

匂いの良い鮮やかな花々が、地面を覆う芝や木々の梢の間に咲き乱れている。

潤は北の塔に来るたびに見る羽目になるこの鮮やかさに、背中が逆毛立つのだった。それは、ここを過ぎれば地獄が口を開けていることを痛いほどに感じるからだ。

北の塔に入れられた者たちは、待ち受ける地獄に、どれだけ絶望しただろう。

特に、謂れの無い讒言に陥れられた、罪のない者たちの心はどれだけの恐怖に震えただろう。

潤は幾人もの傷を治しつづけていた。その中には、確かに本当の罪人もいた。ひとを殺した者も、金を奪った者も。しかし、罪人の多くは、裏切られた者が大半だった。

王妃のお気に入りの罪人が、無実なのだと、潤は知っている。

日々彼を癒しているからなのか、彼の記憶もまた潤の中に流れ込んできたのだ。

王の近衛だった彼は、だれよりも高潔な騎士だった。

王に忠誠を誓い、その命を捧げた。

彼の中の王の姿は、何よりも凛然と崇高ですらあった。

黒々とした鋼のようなまなざしが彼に向けられる。たとえその瞳の中に何一つとして感情が見えなかったとしても、彼はそれだけで満足だったのだ。

王のために自分は存在する。

王を守るためにある近衛のひとりが、その王の妃に触れることができるはずもない。

たとえ、王妃自身に望まれたとしても。

彼はただ、王妃の手を拒んだだけなのだ。

それだけで、彼は日々死ぬ寸前までの拷問を受け、潤の手に癒されつづけなければならない。

まるで、昔読んだことがある外国のおとぎ話の中の登場人物のように。

彼の救いは、死だった。

王によって与えられる、死。

求めるそれには王妃の求愛を受け入れなければならず、高潔な彼にはなによりも忌むべき行いだった。

しかし。それを経なければ、王による断罪は与えられることはない。

それ以外の死は他ならない潤によって奪い去られ、彼は狂気と恐怖とを行き来しつづけている。

その絶望を思い、それに加担している自分を思い、潤の心は重く沈んでゆくのだった。

馥郁とした匂いが、風にぬぐい去られた様々な粒子に取って代わる。

しかし。

それらは、潤の心を癒すことはない。

恐ろしいだけだった。

「……っ！」

誰かが名前を呼ぶ怒声じみた声に、潤の肩が震えた。

休憩時間が終わったのだ。

重く鈍る足を、塔に向かって動かした。

それはとても、美しい世界だった。

七色に輝く白銀の世界。

空はラベンダーに染まり、大地は緑を育む。

存在するものと言えば、白銀のたてがみをなびかせ細かな鱗を輝かせる不思議な生き物。

濃密な大気は彼らを抱き、彼らは飢えも渇きも知らなかった。

世界は穏やかで、ただそれだけだった。

ただそこにある幸福を享受するだけでよかった。

それがすべてだったからだ。

あの時まで。

あれは、影。

存在して二度目に見る漆黒だった。

同胞のからだにあんなにたくさんの闇が内包されていると、誰が知っていただろう。

たくさんの異形の生き物が、前足に光り輝くものを持ち、同胞を斬り殺してゆく。

救う術もなく、逃げることすら思いつかなかった。

ただ、狩られてゆく。

ひとりまたひとりと消えてゆくたびに、同胞の中から闇があふれだし、世界を染めた。

そうして、残るものは、自分、だけになったのだ。

死を捧げる光り輝く刃。

それを握る黒い影。

その顔に見覚えがあった。

気まぐれに助けた、異界の住民。

ならば、同胞を殺したのは、自分なのだと。

押し寄せてきたのは、生まれて初めて感じた後悔だった。

「潤」

呼ばれて目が覚めた。

「……気分が悪いのか」

酷い顔色をしているとメガンに言われて、潤は首を横に振った。

たしかに体調は悪い。腹が切り込まれるように痛んだ。しかし、これ以上心配をかけてはいけないと思ったのだ。

メガンとマルカは、ここでこき使われている。

髪が白くなっただけでもとても心配されたのだ。

あの時は、ふたりとも厨房や掃除の手伝いをできずに、きつく叱

責されたと後になって聞いた。

「夢見が悪かっただけだ」

よくは覚えていないが、胸に残る感情が、夢がいいものではなかったのだと教えてくれているかのようだった。

夢の名残の感情が、胸にいつまでもわだかまって、それで腹痛が起きたのかもしれなかった

花を見ていた。

メガンが持たせてくれた弁当を食べる気力は相変わらずなかったが。

細かくちぎったパンをばらまくと、すっかり待ちの体勢となっていた鳥たちが寄ってくる。

挟んでいたハムを落とせば、野ネズミが銜えて走り去った。

ファンタジー映画のようなシーンではあったが、潤の心は癒されない。

花の香りが高く香れば香るだけ、その裏側に隠そうとする闇がより強く感じられた。

やめてくれと服を握りしめてきた手の感触を思い出す。

おそらく以前は逞しかったのだろう手は、今や節が目立つだけの骨と皮へと変貌を遂げている。

その弱々しさにすがられて、どうすればよかったのだろう。

メガンとマルカを思った。

あのふたり。

彼らがいるから、寂しくない。

彼らがいなければ、自分は立っていられない。

誰も自分を知らないこの世界で、彼らだけが、家族のように思えた。

高みから自分を見下ろした金の瞳の冷酷さを思い出す。

王妃だという彼女に逆らえばふたりが殺されるのだと、暗に示唆した毒をしたたらせるような甘い声に、潤は背中を震わせた。

王妃は絶対に、するだろう。

元近衛の拷問を見るために北の塔へと足を運ぶ王妃であるならば、自分が逆らえば必ずふたりを傷つけ殺そうとするだろう。あまつさえ、自分に、彼らの傷を治させるかもしれない。幾度も痛めつけるために。

だから。

ふたりを守るためにも、潤は今日もまた、王妃の贄の傷を治したのだ。

彼らの手を無視して。

幾つもの手が、縋りついてくる。

虚ろなまなざしの奥に、悲しみや苦痛、諦観をたたえて。

それらを無視する自分もまた、彼らには、拷問吏たちと何ら変わらぬ血も涙もない者と見えているだろう。

もう放っておいてくれ。

治さないでくれ。

殺してくれ。

と。

自分自身の耳を塞ぎ目を潰したくなるような、彼らの嘆きに、潤の視界が、揺らぐ。

流れる水のようなかすかな音が耳の奥に谺した。

目の前に薄いレースのカーテンがおりてくるような、周囲の不鮮明さ。

次いで襲いかかってきたのは、青いインクが水にこぼされたような視界の暗さだった。

毛穴という毛穴から、脂汗が滲み出す。

吐き気と耳鳴りに堪えきれず、潤はその場所にうずくまった。

開いた口から犬のような息を繰り返し、どれくらいそうしていただろう。

汗と唾液が、地面を濡らす。

それがわかっていても、立ち上がることさえできなかった。

関節がばらばらにちぎれそうなほどに、自分のからだが重い。

できれば、このまま地面に横たわってしまいたかった。

それをしないでいるのは、そうなったが最後、起き上がることができなくなるかもしれないからだった。

昼の休憩もそろそろ終わる。

なんとかして立ち上がり、引き返さなければ。

潤が地面を引っ掻くように力をこめたときだった。

ともすれば霞む視線の先に、人影が現れたのだ。

「なにをしている」

降ってきた背筋が粟立つほどの冷たい声からは、感情のかけらも感じることはできなかった。

6回目

夢を見る。

知る者とているはずのない名を呼ばれる夢を。

うたた寝をしていたのか。

男は書類を一瞥すると不裁可の山に落とした。

その夢を見た後は、久しく頭痛に苛まれる。

眉の間を指先で揉みほぐした。

椅子から立ち上がると、男は場所を移す。壁際のカウチのひとつに身を横たえた。片手の甲を額に、目を閉じた。

鈍いものの確かな痛みが、男の頭を冒してゆく。

夢の続きのように、視界が赤く染め上がった。

聞こえるはずのない声が、悲痛な響きをはらんで聞こえてくるような気がした。

絶望に囚われた声が、男の耳に谺する。

静かな、落ち着いた声の主だった。

男とも女ともつかないやわらかな声で呼ばれることが、好きだった。

憂いを帯びた琥珀の瞳と七色に輝く白銀の髪の、男が愛したただひとり。

まなざしの奥に絶望を宿して、それでいて男を愛したただひとり。

いや。

あれもまた、男と同じく、一柱と呼ぶべき存在だった。

太古の獣。

男が世界を手にするための犠牲となった、最後の古の神だった。

「王よ」

扉の外からの声に、男は夢幻の世界から現実へと立ち戻った。

カウチの上に身を起こし、ゆるくひとつ首を振る。

男の記憶からあふれだしたかのようなあたたかな色に染まった部屋の中、黒をまとう彼だけが闇のようだった。

黒をまとった丈高い男が潤を見下ろしてくる。

「なにをしている」

霞む視界の先、着衣の黒にも似た男の声に、潤の背中が鳥肌立つ。

「答えないか」

別の誰かの声と同時に、潤の顔が仰向けに晒された。

首に走った痛みに、新たな涙がにじみ出す。

その歪む視界の先に、無表情に潤を見つめる瞳があった。

整えられた漆黒の髪を後ろに梳き流した秀でた額に嵌った鈍い黄金の額飾りの下、猛禽にも似た鋭い二つの目があった。それは、若くもなく老いてもいない、理想的な男性の容貌の中から、無表情に潤を見下ろしていた。

ただ黒い、いや、昏いものに倦みはてたようなまなざしが、潤の視線を捉えた刹那、ふと揺らいだかに見えた。それは、誰にも捉えられることのない錯覚とも思える束の間のことではあったが、ほんのわずかな戦慄ではあったが、確かに男の心が小波立った証であった。

もちろんのこと、男のまとう雰囲気に怯える潤には、捉えることができないほどかすかな変化に過ぎなかった。

「その制服は、北の塔に詰めるものだな」

男の示唆に、潤を背後から縛める誰かの手が震えるのを潤はかすかに感じていた。

「まだ若いな。十、四か、五といったところか？」

鋼めいた鋭さをはらむ視線には、幾ばくかの暖かみも感じることはできない。

「答えないか」

繰り返される強要に、

「じ、十七……」

潤は絞り出すように答えた。

「歳の割には幼いな。名はなんと言う」

三たびの強要を恐れた潤が、

「ジュン」

と、口にした。

その刹那に、潤は頬に軽い衝撃を感じた。

「誑るか」

衝撃に閉じた瞼をもたげた瞬間、潤は後退さろうとして、ならなかった。

目の前に、男の顔があったからだ。

男の目が、先ほどとは違う何かを宿して、潤を凝視していた。

視線を逸らすことなど、できなかった。

「た、たばかってなんか……」

それだけを口にするのさえ、やっとのことだった。

「なら、本名を答えよ」

言っちゃ駄目だ。

青ざめたメガンの顔が脳裏をよぎった。

しかし。

目の前の男の怖いほどのまなざしに、迫力に、逆らうことはできなかったのだ。

「うるう」

と、潤は、ここに来て以来呼ばれることのない名を口にしていた。

6回目（後書き）

短くて申し訳ありません。

7回目

潤が自分の名前を告げた時、後ろから彼を押さえつけている手が外れた。外れると同時に、鋭い悲鳴めいた叫びが空気を引き裂いた。

振り向いた視線の先に、それまで潤を押さえつけていた男の見開かれた瞳があった。

青い二粒は、恐怖に震えながら潤を見下ろしている。

いや。

忌まわしいものを見るような、見てはならないものを見るような、そんなまなざしだった。

なんで……。

わからなかった。

そう。

そんな目で見られる謂れなどない。

どうしてだと、ただ見上げていた。

凍りついた空気を砕いたのは、黒をまとった男の含み笑いだった。

ゾッと、頭からぬるりとした生あたたかな何かを浴びせかけられたかのような不快な感覚が、潤を捉えた。

「そうか。その名では、口にはできぬな」

では、私もお前のことはジュンと呼ぶことにしよう。

「？」

男の真意を汲むことなど、この時の潤にできるはずもない。

何故、この、目の前にいる迫力のある男が、自分の名前を呼ぶ必要があるのか。

金輪際会うこともないだろう、地位の高そうな男だというのに。

「ジリア。先ほどの名は忘れよ」

「ぎ、御意」

ジリアと呼ばれた男が深く腰を折る。

「さて。ジュン」

全身の震えを堪えようと両手で自分自身を掻き抱いていた潤は、男の声に全身を震わせた。

強いまなざしに背けた顔を、無理矢理男に向けられた。
顎を捉える男の手から有無を言わせない意志の強さを感じていた。
「我が名を告げるわけにはゆかぬが、我をグレンと呼ぶことを許そう」
「王っ」
ジリアの悲鳴が再び潤の耳を射た。
「ご自身が何を仰られているのかっ」
「ジリア」
静かな、それでいて有無を言わせさない鞭の一振りのような声音だった。
「も、申し訳ございません」
王と呼ばれ、グレンと呼べという男を、ただ、潤は見上げる。
何を言っているのか、グレンのことばを理解するための情報が、潤には欠けていた。
「わからない。と言う顔をしているな」
クツクツと喉の奥で押し殺すような笑い声が、潤を逆毛立たせる。

粘つくような笑い声だ。

しかし、潤はそんな笑い声であれ、彼が笑ったことがどれほどの驚愕をジリアに与えているか、わずかも気づきはしなかった。

王がどれほどの歳月を笑うことなく過ごしてきたのか、潤が知るはずもなかったのだ。

顎を、グレンが引き上げようとする。

地面に腰を落としていた潤が膝立ちにならざるをえないほど強い力だった。

眉間に痛みのために深い皺が寄せられる。

「男であり女である。まるで、反対だな」

誰と？

聞くよりも先に、驚きが立った。

どうして、知っているんだろう。

知っているのは、メガンだけなのに。

「お前のからだが完成されれば、私はお前を抱こう」

揺るぎのない主張が、潤を縛めた。

それは決定であり、覆されることはないのだと。

「では」

ジリアがすべての感情を押し殺し、

「ご側室さまにお部屋を準備致します」

そう告げた。

告げられたことばを理解した潤は、そのまま、意識を手放した。

もはや、すべては、潤の手には負えないところまで追いやられたことを認識したための、現実逃避に過ぎなかった。

それでも、それは、潤に必要な休息でもあったのだ。

7回目（後書き）

ちょっとこの場面、しつこいですね。済みません。

8回目

名前を呼ばれることはない。

誰からも。

名などないのだ。

与えてもらえなかった。

ただ、“王妃”と、呼ばれるだけだ。

“王妃”

形だけの。

ただ、そこにあるだけの存在。

悲しみはない。

あるのは、胸に滾る、怒りだ。

すべてに対する。

欲しいと思う心だけだ。

けれど、欲しいと思い手を伸ばしても、支配する存在のために、受け入れられることはない。

“彼”がいるから、自分は“彼”の王妃であるから、手に入れることができないのだ。

それを思えば、怒りが滾る。

自分という存在に。

“彼”という存在に。

そうして。

自分を受け入れることのない、すべてに。

何もかもを呪っていた。

受け入れないのなら、死ねばいい。

滅べばいい。

白く濁った灰色の瞳を見下ろしながら、王妃の赤く彩られたくちびるが笑みをかたどってゆく。

ああ、これも、もう、死ぬのだ。

結局、自分の手を一度として受け入れることのなかった騎士である。

もう少し。

もうしばらくの間命をつながせて、手を取らなかったことを後悔させたかったというのに。

あれは、“彼”に奪われてしまった。

あの、自分とは正反対の、両方の性を持つ存在。

あれが苦しむさまも、楽しかった。

なにも持たない自分とは違い、両方を兼ね備えたあれが、自分の命令になす術もなく翻弄され髪の色を無くしたと知った時、こみあげてきたのは、喜悦だったのだろう。

暗い、闇の底に沈む喜悦だ。

しかし、あれも、もう、無い。

膝を曲げ、騎士の汚れた髪を掴んだ。

うめき声とともに、口から血が滴り落ちる。

その心地好い匂いに、王妃は目を細めた。

絶望の死に瀕する者の流す血は、心地好い甘さを感じさせる。

先の細い舌で、それを舐めとった。

この甘さを、できる限り長持ちさせたかったのだ。

なのに、あれは、“彼”に奪われた。

“彼”の愛妾として、今頃は抱かれていることだろう。

自分は、抱かれることなどないというのに。

金輪際。

ただの、名のみの“王妃”なのだ。

子を生すことも、性の歓びも、知ることは無い。

代わりのように、“彼”が自分に与えてくれるのは、壊す悦びだった。

誰を殺そうと、何を潰そうと、“彼”が自分を罰することは無い。

これまでも。

これからも。

心の奥底に渦巻く飢渇が何のゆえなのか、“王妃”は深く考えること無く、騎士の髪から手を離した。

小さなうめき声が騎士の末期と知りながら、“王妃”が屍となった騎士を顧みることは無かった。

馴染んだ声が、潤を目覚めさせた。

泣きつかれて腫れた瞼が熱く重いような気がする。

からだも、だるい。

からだが内側から変わってしまったのだと、自分から流れ出る血の生温さに戦慄する。

少し動くだけで、ぬるりとした感触が流れ出る。

止める術は無く、ただ、布を幾重にも折り畳んだものをあてがうだけなのだ。

イヤだと思った。

自分は女ではないのだと。

それなのに。

新たな涙があふれだす。

「ジュン」

「メガン……」

辛いのか。

囁かれて、顔を伏せた。

褐色の髪が、白いシーツにこぼれた。

グレンと名乗った男に命じられたと、髪は元に近い色に染められたのだ。

あの日。

気を失ったあの日のうちに、潤はあの男の愛人へと祭り上げられた。そうして、そのまま、この部屋へと連れて来られたのだ。

広く贅沢な部屋だった。

孔雀石の床と天井に、アクセントとして繊細な細工の銀がふんだんに使われている。

置かれた家具は褐色の組木細工で、これにもアクセントは銀細工が使われている。

玄関のような前室と、応接間、居間に寝室、それに、メガンとマルカの部屋がついていた。

それでも、居心地は良くない。

シルクや毛織物にくるまりながら、心は休まらない。

目が覚めた時、メガンとマルカが目の前にいた。

『王さまにジュンにいちゃんの世話をするように言われたんだ』

マルカの説明に、潤は、怯えた。

それはとりもなおさず、ふたりに知られているということだ。

メガンの自分を見るまなざしが痛かった。

『からだが完成されれば、お前を抱く』

あれは、つまり、この出血が止まれば、と、そういうことなのだ。

なぜ、知っていたのか。

王であると同時に神であるあの男にとって、知らないことは無いとでも言うのだろうか。

自分のからだから流れ出す血が女である証だと思えば、嫌悪に引きつる。止まれと願う。

しかし。

それが終われば、女として扱われるのだ。止まらなければいいと、願う。

あの男。

グレンが王であろうと神だろうと、いずれ訪れる未来に、絶望がこみあげてくるばかりだった。

救いは、あれから一度としてグレンの顔を見ることがないということだ。

それでも。

こんな状況がいつまでも続くわけがない。

遠からず、ことばの通りにされてしまうだろう。

背中に、あたたかな掌の感触を感じた。

「逃げようか」

小さな声だった。

顔を上げたジュンの目の前に、メガンの真剣な顔があった。

「バカ言うな」

首を横に振った。

「お前の方が、よくわかってるだろう」

生まれてからずっとこの世界で暮らしているメガンの方が、王に関する虚実織り交ぜた噂をよく知っているはずなのだ。

「できるわけない」

「できるさ」

「できないよ」

「決めつけるなよっ！」

「決めつけるさっ！　あれは人間じゃないんだろ、神だって話じゃないかっ。そんな訳の分からないものから逃げられるわけないだろう。そんな危ない橋、メガンやマルカに渡らせられるわけないじゃないか」

叫べるだけ叫ぶと、潤はベッドから起き上がった。

それだけでも不快な感触が襲ってくるが、構ってなどいられない。

寝室を出、居間の窓を開け放つ。

窓の外には庭園が広がっている。

美しい花が咲き乱れ、小振りな噴水からは水が沸き出し、噴水を拠点とする小川が円を描くように循環していた。小川に囲まれたささやかな空き地にはテーブルセットが据え置かれた四阿のようなものまである。

のどかな風景に、しかし、不似合いな存在がある。

窓から外に出るそぶりを見せた潤の左右にふたりずつ、剣を腰に落とした騎士が片膝を地面についた姿勢のまま並んでいるのだ。

「これでも？」

メガンが知らないはずはない。

なのに逃げようという彼の心が嬉しくて、それでも逆に、痛くてならなかったのだ。

逃げたらどうなるか。

判っていても言わずにいられないメガンが、自分をどう思うのか。

グレンに抱かれた自分をどう見るのか。

辛くてならなかった。

助けられなかったと自分自身を責めるだろうメガンが、辛くて、そうしてほんの少し、鬱陶しくて、ならなかった。

行き止まりだと。

既に王手はかかっている。

あとは、摘まれて、飲み込まれるだけなのだ。

諦めてしまえば楽なのに、それができない自分が惨めで、それを許してくれないメガンが憎かった。

泣き笑いの顔のまま見やるその先で、メガンもまた顔を引きつらせて項垂れた。

四人の騎士が王直属の近衛の制服に身を包んでいることを、メガンは見て取ったのだった。

9回目

半ば以上閉ざしたグレンの意識に、下座に控えるものたちのうちのひとりが奏上する声が届いてくる。

軽く瞼を閉じて片手を顎に乗せた姿は、まるで眠っているかのように見える。しかし、その場にいるものは誰ひとりとして、グレンが彼らの言葉を聞いていることを疑ってはいなかった。

事実。奏上の声が止まるや、グレンは鷹揚にうなづいた。そうして、顎を支える手とは逆の手を一振りする。奏上していた男が頭を下げて椅子に座ると、その隣に座る次のひとりが椅子から立ち上がった。

奏上されるものにうなづき手を振る。それをどれほどつづけただろう。

閉ざした意識はいつしか、過日側室へと召し上げた存在へと向かっていた。

「ウルウか」

グレンが思わずと言った風情で口角を持ち上げる。

禁忌の名をグレンが口に上らせたことに、周囲の動きが止まったことを感じた。

クツクツと、喉が震えた。

目を剥き青ざめたものたちが凝視してくるのに目を向け、

「どうした。もう終わりか」

と、グレンが言う。

穏やかな口調ではあったが、見開かれた瞼の下から現れた瞳は暗い。

感情の感じられないまなざしに、凝りついた空気が動き出す。

グレンがテーブルから持ち重りのする銀のゴブレットを取り上げた。赤い液体が、ゴブレットの中で緩慢に揺れている。

赤。

あの日、目の前の少年から立ちのぼったのは、甘い女の匂いだった。

北の塔で働いていると判る灰色の服をまとった白い髪をした少年。見た目は少年であるというのに、その周囲に燻り立つものは、紛うことなく女のそれだったのだ。

両性か。

かつて愛した古の神をグレンは思い出していた。

種の違いからか、そこに存在していながら異なる次元の存在だったからなのか、男であり女でもあった愛した存在との間に子を生すことは適わなかった。

子なりといれば、世界も自分も違ってはいただろう。

しかし。

グレンは自身の罪を理解していた。異界にあった古の神を殺したことが、彼の唯一にして最大の罪であるのだと。

あまつさえ、彼は、最後の古の神を自身の欲で汚した。

汚れも知らぬ両性の神を、抱いたのだ。

古の神は、穢れ、堕ちた。

グレンは古の神を囲い、ただ愛した。

愛しつづけることこそが、古の神に対する贖罪だとグレンは信じていたのだ。

そうして、いつしか、古の神を“神”と知る者は、グレン以外には存在しなくなった。

9回目（後書き）

インフルエンザで長く空いてしまいました。
しかも短くて、申し訳ありません。

１０回目

なぜなら、王でありながら神であるグレンと同じ時の流れを生きるものは、神以外には存在しなかったからである。

この上ない存在だった。

ふたつとない、極上の、宝物。

しかし、存在は明らかに彼らの世界にあるものとは異質でしかなく、だから、ひとは、その異質な存在が彼らが崇める“神”の唯一であることを認めることができなくなったのだ。

ただ、神であるグレンにも神であったそれにも、ひとの心は理解できないものであったのだろう。

まるで親に見捨てられた子供のように、親の興味を惹こうと闇雲に泣きわめく子供のように、自分たち以外に向けられるグレンのまなざしをひとは厭うようになったのだ。

嫌悪はいつしか憎しみへと変貌を遂げた。

良くも悪くも絶対の存在である神は、急激な変化を知らない。ゆるゆるとただ自然が我慢強くその形を変えてゆくかのような変貌し

かしないのが、神である彼らの性質のひとつであった。ゆえに、ひとならぬ彼らに、それは伺い知ることのできない心の動きであったのだ。

蛋白石で飾られた淡く不思議な風合いの部屋で、異界の神はただグレンを待っていた。

異界の不思議な旋律で紡がれた神の名を、この世界のことばに直せば、“ウルウ”となった。

ウルウと、愛する神の名を呼ぶ。

淡い花の色に染まる布に埋もれて眠っていた神が頭をもたげる。

同胞を失い世界を失い流した涙に琥珀の色は色褪せて、そうして血の色を宿すようになった。

しかし、それすらもグレンには至上の宝珠としか思えなかった。

彼に仕える人間たちが何代も代替わりをしてゆくうちに、彼らの時間はどうしてもひととは同じには流れないのだという証のように、堕ちた神はゆるやかに変容を遂げていた。

グレンに抱かれるようになって、異界の神はひとがましい存在へと変貌を遂げはじめたのだ。

すこしずつすこしずつ、ただグレンという存在にふさわしくあろうとするかのように。

その健気とさえ言える変容を、グレンがどれほど愛しく思い愛でていたのか、知る者はといえば、ウルウに仕えたほんのひとにぎりの人間だけだった。

苦痛に歪むまなざしは汚濁も残酷も知らないとでも言うかのように、美しい。

その一対の宝玉に盛り上がる透明なしずくが何故なのか、知らない振りをすることなど簡単だった。

慎ましやかなまろみを帯びた胸のふくらみが、双の性を持つのだと主張する下半身の象徴が、切なく震える。

それらを愛しみ、その名を呼ぶ。

悲しむことなどどこにもありはしないのだと、すべては自分の罪なのだと、囁いた。

そなたを欲した自分の罪なのだと。

あの日あの時、たまさかに迷い込んだ異界の存在にどれほど心を奪われただろう。

未だ神でなかった頃の幼いグレンは、ただ一目で魅了されたのだ。

そうして、知った。

どうすればそれを手に入れることができるのか。

手に入れた後はどうなるのか。

神になりたくて手に入れたのではない。

愛して手に入れたから、神となったのだ。

古き神々を殺し、その血に濡れて、新たな神は世界を創造する。

いずれは、自分もまた、そうして殺されるのだろう。

しかし、そこに恐怖はなかった。

普遍の存在としてそこに只在りつづけることは、ひとが想像する以上に苦痛なことなのだ。

いつか訪れるだろう死は、神にとってはある種の救済ですらあるのだから。

だから、ウルウから死を奪ったことに対する罪悪は常にグレンを苦しめた。

それでも、どうすればこの愛しい存在を失うことができるだろう。

彼にだけ教えた真の名を、彼のやわらかな声音で紡がれることの悦びを、失うことなどできなかった。

１０回目（後書き）

グレンさん、結構健気かな～と思ったり。
説明的ですねぇ。
も少し続くかな。
短めですが、少しでも楽しんで頂けると嬉しいです。

11回目

それなのに。

今いる場所さえも束の間忘れかけて、グレンは我に返った。

失われてしまった無上のもの。

それを、奪い去った者たちの末が、自分を見ている。

ふつりと胸の奥底深く、こみあげそうになる感情を、グレンはいつものように圧し殺した。

あれもまた、ある種の愛故であったのだと、理性が告げる。

神であり王である自分に対する愛故に、ひとは間違いを犯したのだ。

後悔が代わりにこみあげてくる。

絶対者であるはずの自分が、なぜ、愛する存在を守れなかったのか。

それは、彼らが自分のためにという認識を持っていたからに他ならない。

彼らはグレンのために、グレンを誑かす異形の者を殺すことを決意したのだ。

異形と彼らの呼ぶ存在が何であるのかを、彼らはもはや知りもしなかった。知ろうとさえしなかったのだ。

神のために。

その題目は、グレンを縛る。

内容が正しかろうと不正だろうと、人々の思いは、グレンを縛り付ける鎖となってしまった。

だから、グレンは、動けなかったのだ。

その姿形をほぼひとのものへと変貌させてそこに存在するウルウを、ひとは殺したのだ。

殺されるその刹那にまでも、ウルウはただ笑んでいた。

それは、死ぬことができる悦びだったのか。

それとも、彼に対する思いやりであったのか。

今となってもグレンには判らないままである。

ひとであった頃のグレンの最後の記憶と同様に、殺されたウルウのからだからあふれだしたのは、血ではなかった。

彼の同胞たちからあふれだしたのと同じ闇が、ウルウからあふれだす。

ウルウの中からあふれだした、闇に、ひとは恐慌をきたして逃げ惑った。

その光景を、ただ、グレンは見やっていた。

流れる涙にかすむ視界に、おろかな人々の犯した罪を映していたのである。

それからの幾年かを、ひとは、暗黒の時代と呼び嘆いた。

ウルウからあふれだした闇が、世界を閉ざしたからである。

グレンの流した涙が、彼らに己の犯した過ちを気づかせたからである。

しかし、それは、既に遅きに過ぎた。

グレンは、その宮の奥深くに自らを閉ざしていた。

神不在の時代の到来である。

ひとはただ、遅きに過ぎる罪の意識に苦しみ悶えた。

そうしていつしか、神が愛し、自分たちが醜い嫉妬故に殺した、古い異界の神の名は、禁忌と化してしまったのである。

１１回目（後書き）

あれ？
久しぶりの更新ですが、斜めに話が走っているような気がします。
主題がずれてますね。自覚は在るのですがｘｘ
判りにくい文章だったら申し訳在りません。いつにもまして、説明的かも。
少しでも楽しんで頂けると嬉しいですが。

１２回目

苦しみの時代は永く続いた。

人心は荒れ、世は荒んだ。略奪も暴行も、人殺しさえもが日常茶飯事となり、力ない者はただ怯えるよりなかった。

親を亡くした放蕩息子のように、ひとは己の不明を恥じ、いつしか、神そのものが禁忌の様相を呈したのだ。

ひとは、神を忘れたふりをした。

しかし。

そうでないものもいた。

直接神に仕えつづけた者たちである。

神が閉じた扉を中心に、かつての神の城は、神殿へと変貌を遂げた。

幾代もが過ぎてゆく。

しかし、彼らは祈りと謝罪とを忘れなかった。

禁忌とされる神を心の奥底で密かに求めるようになっていた襲われ略奪されるだけの弱い者たちは、彼らの元へと集まった。

それが、世の中心、神王の都のはじまりである。

元へ。

ひとの祈りが通じたものか、神が姿を見せたのは、あまりにも唐突だった。

何の前触れもなく、祈る者たちの前で、扉が開いた。

神の姿は、彼らの間で語り継がれた、光り輝く男神とは違っていたが、まとうものはあきらかだった。

神殿の長が、

「我が主」

と驚喜のうちに額付けば、誰が疑うだろう。

神が連れ立つ黒髪の美貌の主を、かつての轍を踏むまいと、ひとは神に属するものと、認めた。

その本性を知ることなく。

そうして、ひとの苦しみは、まだ続くのだ。

神の絶望は、まだ癒えてはいなかった。

ひとはただ、己らの犯した罪の深さに、ことばをなくすよりなかったのである。

逃げることは、不可能だった。

すべては、神の決めたことであるのだ。

潤はくちびるを噛み締め、瞼をきつく閉ざした。

眉間に深く刻まれた皺が、悦楽に酔う証でないことは、あきらかだった。

肌触りも極上の敷き布が、潤のからだの下で捩れる。

滲む涙は、羞恥か苦痛か。その両方か。

朱に染まるからだが、小刻みな震えを宿す。

イヤだと、潤は思った。

女のように抱かれることは、潤にとって、苦痛以外のなにものとも思えなかったのだ。

誰か助けてと。

食いしばった口が、空気を震わそうとする。

しかし。

それは、からだの上を動くグレンによって阻まれた。

まるで潤の心の叫びを読み取ったかのように、グレンの動きが激しくなったのだ。

ただひたすらに翻弄されて過敏になっていた潤のからだは、それを堪えることなどできなかった。

そうして、潤は意識を失ったのだ。

ごめんね。

ウルウ。

だれかがささやいた。
耳に心地好い声だった。
でも、君でなければならなかったんだ。
私のすべてを抵抗なく受け入ることができる器は、君だけだったから。
哀しそうな、それでいて、どこか歓喜をはらんだ声だった。
どんなに探しただろう。
どんなに求めたろう。
もう一度彼と共に在るために必要な器を。
私もまた、私を強く求める彼を求めたのだ。
彼は私のゆえに罪を犯し、私は、彼を愛したから彼の罪を許した。
それもまた罪だと知っていて、どうすることもできなかった。
あんなにも激しい思いが私の心の中にあるなどとは、少しも知らなかった。
ただ存在するだけでしかなかった自分に、あんなにも様々な感情があるなどとは知らなかった。

だから。

愛するという、罪にも似た苦しさに、私は溺れてしまっていた。

与えられる快美な感覚に、溺れていたんだ。

初めての感情と感覚に、溺れていたんだ。

そんな私に罰がくだらないわけが無い。

たとえ神であれ、罪を犯すこともあれば罰を受けることもある。

そういうものなのだ。

だから、彼を失うことは、私が殺されることは、当然のこと。

それは、私に下された罰だ。

しかし。

それでも。

諦めることのできなかった私を許してほしい。

これを最後に、私は眠るから。

だから。

「あ……あああああーっ」

潤の叫びに、扉が開いた。

「ジュンっ」

「ジュンにいちゃんっ」

駆け寄ったメガンとマルカに、ジュンは抱きついた。

13回目

ジュンが我慢していることは、判っている。

ジュンが何を我慢しているかも、知っている。

知りたくなんかなかった。

けれど、知っているからこそ、ジュンが自分を頼ってくれるのだと言うことも、理解していた。

もちろん、この城にいるものは、ジュン自身を知らなくても、ジュンがどういう存在なのか、知らないなんてありえない。ジュンのところに、それだけ頻繁に、この世界で何よりも尊い存在が通っているのだ。それでも、ジュンが頼るのは、弱音を吐くのは、その尊い存在でも他の誰でもない、自分たちの前だけなのだとメガンは知っていた。そうして口には出すことはできないが、それが、ほんの少しだけ自分の心を慰めていることも、理解していた。

しかし。

ついてくるのじゃなかったと、どれほど後悔しただろう。

心が痛んだ。

メガンは扉を睨みつけた。

マルカが今ここにはいないことが、幸いに思えた。それでいて、独り、ここに控えていることが、苦痛でもあった。

なぜなら。

たった今、あの扉の向こうで、ジュンが神王に抱かれているからだ。

神王がやってきた刹那ジュンが見せた表情が、メガンを暗い懊悩へと落しこむ。

最初から、ジュンは自分などの手には入らない存在だったのだ。

あの力。

二つの性。

ジュンは、神の側に属する者だったのだろう。

それでも、ジュンから離れることなど思いもつかなかった。

自分たちを癒してくれるあのすばらしい力を知ってしまっては、知らなかった頃には戻れなかったのだ。

だれよりもやさしいジュンは、そんな自分たちを裏切ることなどできなかったのだろう。

自分たちがジュンの足枷になっていることを痛いほどに感じながら、それでも、メガンはジュンを思い切ることはできなかった。

ジュンの身体の秘密とジュンの身体から立ちのぼる甘いかおりを、知ってしまった時に自分が彼の虜になってしまったのだと、メガンは痛いほどに感じる。

見るともなく見てしまった、ジュンの秘密は、未だ脳裏に焼きついている。

忘れようとして、忘れられるものではなかった。

守りたかった。

誰にも散らせたくなかった。

それを、神王は、今もまた、当然とばかりに散らしているのだ。

メガンの心臓が、握りつぶされるかの痛みに襲われた。

あの日、神王は突然、何の前触れもなくやってきた。

メガンは、思い出す。

その日はいつなのか。まるで刑の執行に怯えて暮らす死刑囚のように、不安と恐怖とに苛まれていた日々は、あの瞬間に、終わったのだ。

代わりに訪れたのは、平穏などではない。
神王の来訪に震えるジュンの恐怖の日々だった。
それをただ見守るしかないメガンとマルカの懊悩の日々だった。

「誰かがいるんだ」

神王のはじめての来訪があった翌日。
いつまでも起きてこないジュンに、メガンもマルカも、心配のあまりいても立ってもいられなかった。
事後にジュンを清めたのは、神王本人だったのだろう。本来なら、ジュン付きの部屋子である自分たちの仕事だと、騒ぐ胸を堪えてそっと起こさないように確認した。
幾重もの帳に閉ざされた寝台の上、日の光すら色褪せたその中で、死んだかのように眠るジュンに、メガンは息を呑んだ。
土気色した顔色の悪さとは裏腹に、きつく食いしばったのかくち

びると、ながした涙の量を推しはからずにはいられないほどに腫れた目元だけが、色づいて見えた。

かけられた布の下を確認する勇気はなかなか出て来なかったが、それでも、と、勇気を奮い起こした。

一晩でひとまわりも痩せたかに見えるジュンの全身に散る証が何か、知らないほどメガンも子供ではない。

それを見た刹那メガンの全身を貫いたものは何だったのか。

理解する以前に、込み上げる涙となって、視界を白く歪めた。

「ジュンにいちゃん、病気なの？』

我に返ったのは、マルカのその一言のおかげだった。

「違う。さ、起こしちゃ駄目だから、出よう」

自分たちがすることは残ってはいない。

汚れているだろう寝具すら、残されてはいなかったのだから。

マルカの背中を押しやりながら、メガンは、そっとジュンを振り返った。

そうして、メガンとマルカは息を殺すようにしてその午前中を過ごした。

ジュンの悲鳴が聞こえてくるまで。

駆け込んだふたりに、ジュンは抱きついた。

「誰か、誰かがいるんだ」

「ジュン？」

「ジュンにいちゃん？」

全身の震えはとまらない。

怖かった。

グレンに腕を掴まれて、寝台の上に押し倒された。

自分を見下ろしてくる黒い瞳に、捕食者の飢えを見たと思った。

捕まえた獲物を頭から喰らおうとする、期待を見たと思った。

決めたはずの覚悟など、何の意味もなかった。

声もなく服を剥がれ、ただなす術もなく翻弄された。

全身を這うグレンの感触に、ただ鳥肌が立った。

足を開かれ、抱え上げられた恐怖は、すぐに全身を貫く激痛へと取って代わった。

突き上げられ揺さぶられる灼熱の痛みに、目の前も思考も、ただ朱一色に染まったような錯覚を味わった。

身体が変わってゆく。

変えられてゆく。

未知の恐怖に意識を手放そうとしても、どうしてもできなかった。

まるで、診察台の上、医師の手が次にどの器具を持つのかを確かめずにはいられないかのように、最後の意識を無くすことができなかったのだ。

しかしそれも、身体の奥深くでなにかが弾けるまでのことだった。

その一生味わうことはないはずだった、他人の精を体内に受け入れるという未知の感触に、ジュンの最後まで覚めていた意識は、ようやくのことで閉じることができたのだ。

それなのに、ジュンの閉じたはずの意識は、まだ起きていたのだろうか。

その後に起きたことを、ジュンはなぜか記憶していた。

歓喜に震える自分であって自分ではない誰かの思考が、自分に話しかけてくる。

謝罪でありながら、自分の望むことを完遂する強い決意のみなぎったそれを、拒絶することはできなかった。

穏やかにジュンに謝りながら、それでいながら、ジュンの許しなど最初から欲してはいないのだと。

自分からグレンに抱きつきくちびるを寄せ、求められるままに淫らな行為に耽溺した。

それは、自分ではあっても、けっして自分ではない。

見知らぬ、他人だった。

他人に自分の身体の主導権を奪われたのだ。

その屈辱と恐怖とを、どうすればいいのだろう。

勝ち誇ったかのような捕食者のまなざしは、熱をはらんでねっとりと甘く、睦言を紡ぐくちびるは、まるで芳醇な蜜をしたたらんばかりにたたえた大輪の花のようだった。

そうして、見知らぬ他人はそれを嬉々として受け入れたのだ。

違う。

これは、オレじゃない。

じゃないのに！

そんなジュンの叫びは、すべて、意味のないものだった。

ジュンのくちびるから出るのは、他人の感じた快感故のあえかな喘ぎばかりだったからである。

「誰かが、オレの中にいるんだ」

間違いなく自分を見てくれる、メガンとマルカに抱きついて、ジュンはただ、そう言い続けていた。

１４回目

飢えていた身体と心が、満たされる心地だった。

永く、癒されることなどありえないと感じることすら愚かに思えていた、痛みである。

それが。

伸ばされる手が、頬に触れてくる。そこから、じんわりとなにかが広がってゆくような感覚があった。

しかし、それは同時に、苦痛をもよみがえらせる。そうでなければ癒されないとでも言うかのように、そのやわらかな感触に、記憶が目覚めかける。

かつて、愛した者を彷彿とさせるなにかが、確かに、目の前の存在にはあった。

しかし、グレンは吹き出そうとするかつての記憶を、もう一度閉ざしなおす。

それが、癒されることを拒むのだとしても、今は思い出すべき時

ではないのだ。

なぜなら、自分は、満たされたくはない。

すべては、失われてしまったのだ。

失われたものを心に宿したまま、満たされたとして、何になる。

今、自分が持っているものは、なにも、ない。

たとえ、すべてを持っていると誰もが考えていようとも、己の認識は、ただ、無でしかないのだ。いや、違う。無でありたいのだ。無でありつづけたいと、強く願っていた。

虚しい。

苦痛でしかない。

存在するすべてが、煩わしくも厭わしい。

そう考えることが、既に無ではないと判ってはいても、それでも、自分は無なのだと、信じつづけたかった。

なのに。

どうしても、ともすれば短絡的に滅びへとすべてを導いてしまおうとする感情を、諌めようとする己の心を感じる。

それは、かすかな、ほんのわずかばかりの、澱のような愛着だった。

だから、自分は、あれを創った。

嫌悪を、憎悪を、愛までもを総て、あれに預けたのだ。

惨いことをしていると自覚はあった。

しかし、ほんのわずかばかり残った愛情故に世界を滅ぼすことを良しとはしない己の心を守るためには、しかたのないことだったのだ。

自死を選ぶことは、総てが滅びることに他ならない。

最後の最後で踏み切ることができなかった自分自身を嘲笑い、嘆き、慟哭のうちにあれを作り出したのだ。

あれは、己の心の憎悪の部分を実現させる。

だからこそ、どれほどの暴虐を繰り返そうと、破滅までもは至らないのだ。

憎悪の底にどうしても残る、愛のゆえに。

最後に残る愛情は、あれの中では、歪み爛れていることだろう。

それは、憶測などではなく確信だった。

哀れなと思うことは、すなわち自己憐憫に他ならない。

しかし、グレンは哀れみを抱かずにいられないのだ。

総てを押し付けてしまった王妃に対して。

嫌悪と憐憫とを。

「ああっ」

感極まった喘鳴に、グレンは我に返った。

自分が何をしている最中だったのか。

思い出す。

滾る熱を散らす思考を追いやりながら、自分の下で乱れる存在を見下ろした。

自分に応えようとけなげなさまを見せながら、同時に、嫌悪と恐怖とに全身を強張らせようとする、二重写しのような存在に、なるほどと納得する自分をグレンは感じていた。

おそらくは、女である部分と、男である部分とが、無意識に乖離しているのだろう……と。

それはそれで、楽しませてくれる。

無でありつづけようとする自分を、この少年であり少女である者は、楽しませてくれるだろう。

今自分が望むものは、真の癒しなどではなく、たわむれていどのもので充分なのだ。

グレンは、口角をもたげた。

１４回目（後書き）

短めですが、少しでも楽しんでくださると嬉しいです。
グレンの思考がめちゃくちゃですが。

１５回目（前書き）

長く空いてしまいました。
相変わらずぐだぐだですが、少しでも楽しんで頂けますように。

15回目

眠ると、そう言ったのに。

どうしてっ！

あれが最後って、言ったじゃないかっ！

きらめく淡い色の髪が絡み付いてくる。

それを引き千切ろうともがきながら、潤は叫んだ。

振り払っても、ちぎっても、天蚕糸よりもいっそうのこと細い髪の毛が、絡み付いてくる。

蜘蛛の贄の食べ滓のように、潤の精神を絡めとろうとするのだ。

ごめんね……と、くちびるが動く。

でも、やっぱり、彼といたいんだ。

そんな風に、ことばを紡ぐ。

取って代わられる。

その恐怖に、潤は、ただ、暴れつづけるしかなかった。

「ジュン」

「ジュンにいちゃんっ」

目の前に、心配そうな顔のふたりがいた。

「あ……」

「ひどくうなされていたよ」

「大丈夫か」

流れる涙を拭われて、潤はふたりを抱きしめた。

グレンとの情交の頻度の高さが、潤を疲弊させ体調を崩したのはつい昨日のことだった。

そうして発覚した事実が、ジュンを打ちのめしたのだ。

彼は、妊娠していた。

「メガン、マルカ……」

弱い所ばかり見せている。

自分が情けなくてたまらなくなった。

本当に、もしかして、自分は女性より精神的に脆くなっているんじゃないかと思えて来るのだ。

情けない。

少し熱っぽい身体をふたりから離して、ジュンはベッドから出ようとした。

「大丈夫か」

心配そうなメガンに、うなづいて、ジュンは数歩よろめきながら歩いた。

「にいちゃん」

マルカの悲鳴じみた声に、ジュンは自分が床に膝をついているのに気づいた。

「ベッドが嫌なら、ソファに移るといい」

薄い肌かけを手に、メガンが続き部屋に向かうドアを開けた。

「飲み物と食べ物撮ってくるから」

マルカの声にうなづいて、ジュンはソファに腰を下ろした。

ほんの少しだけ開いている窓から、風が入ってくる。

「寒いなら閉める」

「気持ちいいから」

「わかった」

ふたりの態度は変わらない。それが嬉しいような、落ち着かない

ような、変な気持ちになる。

自分でも自分が、気持ち悪いと言うのに。

男なのに。

ジュンには、自分の性の半分が女だと言う自覚が未だに薄い。

ないと言ってもいいかもしれない。

これは本来自分の物ではないのだと、突然身体に穿たれた女性器に嫌悪にも似た感情があった。

それなのに、男に抱かれたあげく、子供まで身ごもったと言うのだ。

気が狂いそうだった。

眠る度、男に抱かれる度に出てくる、あの存在を呪いたくなる。

男に未練を抱き、消えると言いつつ消えようとはしないあの存在だ。

一見儚げでいて、自分の欲に忠実な、悪魔。

自分をこんな境遇に落し込んだ悪魔だ。

憎かった。

肉体を持っていたのならこの手で殺したいくらいには、憎くてた

まらない。なのに相手は、肉体を持たない存在なのだ。

ごめんね……との囁き声に、吐き気がした。

もう少しだけ……と、断ち切れない未練に怖気が走った。

他人のからだを使ってまで欲望を満たす悪魔たちに、逆らうことができない自分に、絶望を覚えるのだ。

そうして、もうひとり。

もしくは、ひとはしら。

自分を見下ろした金色の瞳に、背筋を冷たい物が駆け抜けた。

今朝、突然の王妃の訪問に、ジュンはどうすればいいのか判らなかった。

それは、メガンもマルカもそうだったろう。

王の妾となってから、二度目の対面だった。

最初の日に儀礼的に王妃に挨拶をしてからは、ずっと顔を会わすことはなかったのだ。

毫ほどの興味もなさそうに自分を見下ろしていた金の目に、憎悪

を見出したとジュンは思った。
手にした扇で腹部を指し示され、
「わたくしは、宿すことも育むこともできはしないと言うのに」
押しあてられた扇の先が、かすかに震えているように思えたのは、ジュンが震えていたからなのだろうか。
それとも、王妃の苦しみだったのか。
ジュンには判らなかった。
「このまま力をこめれば、流れるか」
かすかに込められた力に、ジュンはただ目をつぶった。
逆らうことだけは許されない。
絶対的支配者の正妃相手に、逆らうことなどできるはずがないのだから。
もっとも、自分だけだったなら、逆らったかもしれない。
扇をはねのけ、これまでにたまっている色々なことをまくしたてることをしたかもしれない。
しかし。
ジュンには、守らなければならない存在がいる。

いつも自分を守ってくれる、メガンとマルカのふたりだ。

彼らだけは、絶対に、王妃の狂気に触れさせたりはしない。

あの哀れな男たちのように北の塔へと連れてゆかせたりはしないのだと。

「王妃さま」

王妃に付き従う女性が静かに声をかけたのと、突然ドアが開かれグレンが入ってきたのとどちらが先であったろう。

グレンは目したまま王妃に近づくと、ただ、ジュンの腹部へと当てられている扇ごと手を握ったのだった。

「そこに息づくのは、私の子だ。判っていよう」

静かな声音に、王妃が大きく震えた。

それは、恐怖だったのか、それとも何か別の感情のゆえだったのだろうか。

「粗相をいたしました」

強張りついた声で謝罪をすると、王妃はもはやジュンには一瞥もくれずに部屋を出て行ったのだった。

部屋には、グレンとジュン、後はメガンとマルカだけが残っていた。

16回目

ふつり。

ふつり。

こみあげて来る不快な思いを、王妃は噛み締める。

暗い赤で彩られた部屋の中、ひときわ印象的な白い花を花瓶から引き抜いた。

白。

自分は知らぬ、王の過去。

それでも、それがなくては、自分が創られることはなかったろう。

それだけは理解していた。

王の過去の傷が、自分を創ったのだ。

虚無を宿した王のまなざしが、王妃の最初の記憶だった。

「白はならぬ」

と。

王がつぶやいた。

白とつぶやくその声音の底に、何か得体の知れぬものを感じ、目覚めたばかりの王妃は全身を震わせた。

「お前がまとうは明け知らぬ闇の業火。我が心を炙る深淵の苦痛」

それを総て、おまえに贈ろう。

心のままに振る舞うがよい。それこそが我が志に適うと知れ。

王の苦痛が空白の心に流れ込んだ。

総て、負の感情だった。

王の慟哭、王の憎悪、王の絶望それらをもたらす飢渇と渇望と。

自然、王妃は理解する。

自分がうまれたのは、王の復讐のためなのだと。

自分が為すべきことは、ひとを苦痛のうちに殺すこと。

ただそれだけなのだと。

殺すだけ。

そうすれば、自分を創った存在はくちびるの端を少しだけ持ち上げて笑ってくれる。

黒いまなざしが自分を見てくれる。

それが何よりも嬉しかった。

それを、なによりも求めた。

だから、王より贈られた彼の思いに従いつづけた。

それがなくては自分が存在する意味などないと理解していた。

これがあるからこそ、自分は王の隣に存在しつづけることができるのだ。

それなのに。

王は、自分を見ることはない。

いつからそうなったのか。

思い出すことはできなかった。

そんなにも長く、王は自分を見なくなっていたのだ。

改めて気づいて、王妃は王の望みを思い返した。その心に沿うべく動いた。

なのに、王は、名ばかりとはいえ王妃である自分を見なかったのだ。

ギリギリと、心が何かに食まれてゆく。

何故だと、慟哭がほとばしった。

苛烈にひとを苛んで、それでも、心は癒えなかった。

見てほしいのだと。

心にかけてほしいのだと。

心は悲鳴を上げていた。

だから、王妃は、自分を見てくれる者を求めた。心の底から欲しいと願った。そうして、見つけたのだ。つねに王の傍らにあって、清廉潔白な、神王の騎士、近衛とも呼ばれる。欲しいと思ったのは王を見る心酔しきったそのまなざしのゆえだったろうか。そのまなざしが自分を見て、微笑んでくれれば。性別のない自分を受け入れてほしいと、そう思ったのだ。

けれど。

何一つ得られないのだと。

思い知らされた気がした。

『私は神王に忠誠を誓った身。神王妃であられるあなたさまのお手をとることはかないません』

なぜ？

一度でいい、受け入れてくれたなら、おそらくは、満たされただろう。

なのに、拒まれた。

理由は、彼の妃だから。

名ばかりの妃でしかないというのに。

例え誰を求めようと、受け入れようと、彼が自分とその相手を罰することはあり得ない。

涙を流すことをよしとはできなかった。

もとより、王の憎悪を引き受けた器である。いとも容易く、悲しみは憎悪へと変貌を遂げる。

王は、何とも思いはしないだろう。しかし、他の者たちは違う。

王妃の赤く彩られたくちびるが、ゆるやかに弧を描いてゆく。

野生の獣がその場にいれば、全身の毛を逆立てるだろう、壮絶な微笑だった。

王以外のなにものかが、彼が王妃に欲望を抱いていると知れば、どうなる？

クツクツと、王妃は嗤った。

涙を流しながら、嗤ったのだ。

それは、王妃が王以外にはじめて欲しいと思った存在への死の宣告に他ならなかった。

王のまなざしが向かう先を思う。

ふつり。

こみあげてくる不快な思いに、王妃の眉根が寄せられる。

この不快な感情はなになのか。

目の前の人間が、苦痛の叫びをあげ許しを請う。

ひとの関節のはずれる音に少し遅れて、悲鳴があがる。

しかし。

絶叫とともに耳に届くそれが、いつもの心地好さを王妃に感じさ

せることはなかった。

北の塔に詰める者の怖じ気を背に、王妃は塔を後にする。

一歩塔を出れば、外は、色とりどりの花が咲き乱れる。

鼻孔を満たす血と汗と恐怖の臭いを凌駕するほどの、甘い花の匂い。

見れば、傍らに、白い花。

この花が匂いの元凶かと、毟り取る。

甘い匂い。

甘い。

どこか、あれのまとう匂いに似ていた。

人間の怪我や病気を治せる者がいるという噂が耳に届いたのは、いつだったろう。

それはいい。

そう思った。

ただ殺すだけでは物足りないと、常々考えていたのだ。

どうすれば苦痛をより長引かせることができるのか。

その答えが、あった。

だから、招いたのだ。

北の塔で自分のために働かせようと。

それが、こうなるとは。

皮肉というべきか。

あれの膨らみつつある腹を思う。

憎い。

そう思った。

王の心が、変貌してゆく。

いつになく速い速度で。

自分の血を引く子と言う存在が、王をそう変えたのか。

ならば、自分が孕めば、王は、今度こそ自分を見てくれるだろうか。

しかし、自分には子を孕むことはできない。

性がないのだ。

あれとは正反対の意味で、自分は男でも女でもないのだ。

「ほしい」

王妃はつぶやいていた。

あれの腹の子がほしいのだと。

１７回目（前書き）

少々不快な表現がありますので、ご注意ください。

17回目

潤にとって、それは嫌悪以外のなにものでもなかった。

日々育っているのだという、自分の身の内の他人。

自分を抱く男の、子供。

誰かの身代わりに抱かれる自分が、そんなものをどうして受け入れることができるだろう。

未だ抱かれるたびに自分を支配しようとする誰かは、消える気配すらない。意識のほとんどを支配され、淫らに乱れる自分は、自分ではないと言うのに、なのに、グレンは、それでよしと、それこそを愛でる。

本来の自分は、そんなことはできはしないと言うのに。

ならば、ここに自分の存在は必要ない。

このからだだけがあればいいのだ。

いやらしくグレンを求めるからだだけが。

しかし、グレンを求めつづけている誰かに、からだを明け渡すつもりだけはない。

物欲しげに、誰かは自分に強請るのだ。

謙虚の欠片もなく、総てを自分に渡せと、いつのまにかしたたる欲を隠すこともなく、求めはじめていた。

誰が！

渡すものか。

これは、意地だった。

傲慢な誰かに対する唯一の抵抗だった。

支配しようとする、名前すら知らないあの存在と、グレンに対する。

自分を犠牲にしようとした総てに対する。

吐き気が日々襲いかかる。

苦しくてならない。

まるで、自分に苦痛を与えるためだけに、いるかのようだ。

そんなものを、どうして。

人非人と誹られようと、何と罵られようと、ただ、疎ましい。

少しばかり膨らんだような気がする腹を無意識に、殴りつけていた。

「いらない」

こんなもの、いらない。

「にいちゃんっ」

マルカが潤を止めようとする。しかし、いかんせん、力の差は明白だった。

「駄目だよ、そんなことっ、にいちゃんが痛いだけだよっ」

兄ちゃん、誰かっ。

メガンを呼んでも、今はいない。何を食べても戻してしまう潤のために、滋養と消化の良いものを探しに出かけている。

今いるのは、自分だけ。

居間の椅子に腰掛けてぼんやりしていた潤が突然狂ったように自身の腹を叩きだしたのを止める術は、マルカにはなかった。

このままやめなかったら。

もしも、子供が死んだりしたら。

潤を止めようとするマルカの背中を、冷たいものが駆け抜けた。

事故で死ぬのとはわけが違う。

たとえ、潤のこどもだとはいえ、潤が殺していいはずはない。

それに、神王がそれを知れば、罰せられるのは、潤だ。神王がの無表情の裏側で、うまれるこどもを心底待ちわびていることを、マルカは感じ取っていた。

止められなかった自分のことは、別にかまわない。潤が助けてくれたのだ。病気や怪我で苦しむ自分たちを、他の誰でもない、潤が助けてくれたのだ。だから、潤のために死ぬのなら、かまわない。それは、兄も一緒だった。

だけど、潤が死ぬのだけは、嫌だった。

今の潤は、誰のことも助けることはできないけれど、それだけが潤の存在している理由ではないはずなのだ。

何かのために存在するわけじゃない。

潤は、潤だから。

大好きな、潤だから。

だから、無謀なことをしてほしくはないのだ。

自分と兄の願いはただひとつだけだった。

潤にいてほしい。

それだけなのだ。

それだけだった。

けれど、それすらも自分たちの我侭だと、マルカには判っていた。

どうしようもなく哀しくて、辛くて、苦しくて、どうしていいのか判らなかった。

あげく、マルカの口をついて出たのは、

「殺してあげるから」

そんなことばだった。

「にいいちゃんが嫌だって言うなら、欲しくないって言うなら、ぼくが殺してあげる。ぼくがうまれる子を殺してあげる！　だから、だから、やめてっ」

涙があふれる。

そんなにも、イヤでたまらないのか。

苦しくて、辛くて、どうしようもないのかと。

なら、ぼくが、罪を犯してあげる。

どうにかして、ぼくが、神王の子を殺してあげる。

それで潤が楽になれると言うのなら、総てを引き受けてあげる。

そう言って、マルカは潤の背中で泣いた。

罪を犯す覚悟が、神に逆らう覚悟が、マルカの心の中に芽生えたのだ。

「なら、殺してくれ」

暗い声が、マルカの耳に届いた。

暗く、澱んだ、力のない声だった。

「オレはいらない。こんなこども、うみたくなんかない」

自分の中にいると思うだけで、ゾッとするんだ。

吐き気がする。

潤はそれまでの激情が嘘のように、ぼんやりと宙を見ている。

しかし、そのふたつのひとみには何も映っていないに違いない。

もの狂おしい激情が去った虚しい心のまま、ただ、そうと意識せずマルカの背中を押したのだ。

事実、都合の良いことに、潤は、自分が言ったことばを覚えてはいなかった。

自分で自分の腹を叩きつづけたことさえも、潤の意識からは消えていたのである。

17回目（後書き）

メガンとマルカどちらがこうなるか、悩んだのですが。
結果、マルカになりました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4898o/

呼ぶ声

2011年9月19日18時15分発行